塗料・塗装教育の歴史と将来展望

Education in Paints and Coating: History and Future Prospects

坪田　実*、武井　昇*1

キーワード：職業訓練大学校、塗装科、職業訓練指導員、塗料物性研究会
Keywords: Institute of Vocational Training, Department of Coating, Vocational Instructor, Research Group on Physical Properties of Coatings

1.　はじめに

塗装の公教育は主に職業訓練校でなされた。職業訓練校で指導に当たるのは職業訓練指導員である。その職業訓練指導員の養成機関として東京都小平市小川西町に（後、神奈川県相模原市に移転）職業訓練大学校（訓大と略す）があった。訓大には塗料・塗装を専攻する塗装科が設置されていた。本稿では訓大塗装科の変遷を一つの実践例として、塗料・塗装教育の歴史を辿ってみたい。

2.　訓大塗装科の変遷

2.1　草創期（中訓時代、1961～1964年）

訓大の前身である中央職業訓練所（以下、中訓と略す）は1961年に設立された。設立の基盤は、1958年制定の職業訓練法である。当時、日本は安い労働力を武器にして精巧な工業製品を世界に送り出していた。また、炭坑離職者の救済も重要な国の課題であり、職業訓練の需要は多く、指導員の養成と教材の開発は急務であった。そのために、労働福祉事業団（労働省所管の特殊法人）が中訓を設置、運営することとなった。中訓は4年制の職業訓練指導員養成を目的とした公立の訓練所である。訓練科は、公共職業訓練所に多く設置されており、かつ訓練生数の多い基幹的職種を統合した8科、すなわち機械科、板金溶接科、第一電気科、第二電気科、運輸装置科、鋳造鍛造科、木材加工科（木工専科と建築専科の2専攻）、塗装科でスタートした。

当時、どの科も何もない状態で新入生を迎えたようである。厳しい環境下にあっても教職員は必死になって将来の職業訓練界を担う若きリーダを育成しようと懸命な努力をした。何もない時代には精神の充実が不可欠である。所長の成瀬正雄先生（歯車の専門家）はドイツのマイスター制度と哲学者ペスタロッチの思想を導入され、科学・技術・技能の融合がこれからの職業訓練を支えてゆくと力説され、学生も成瀬先生の教えを実践しようと懸命に努力した。

1961年7月、雇用促進事業団が設立され、中訓は同事業団に移管された。

設立当時の1960年代から70年までの10年間で日本の塗料生産量は、**図1**に示すように、約3倍に急増しており、自動車を始め、電気製品の塗装ラインが急ピッチで整備されていた[1]。文部省の学問体系には塗料、塗装に関する項目が無かったが、井上幸彦先生（長岡高工－東工大）を中心にした塗料物性研究会が1957年に誕生し、研究活動は活発に行われていた。1967年に招聘

2013年10月8日受付
* TSUBOTA Minoru

*1 TAKEI Noboru